

徳法寺

親しみやすい仏教

「焼香編」

杉谷 伊吹

こんにちは。皆様はお通夜や葬儀、もしくは法事するとき「焼香の作法」に戸惑ったことがありますせんか？「テレビや映画で見たとおりにする」「前の人を真似て同じようにする」という方もいらっしやるかもしれませんが、それでも構わないのですが、実は宗派ごとに作法が決められているのです。ですから、自らの宗派の作法を覚えておけば、安心して堂々と焼香が出来ます。他の宗派の法要に参列なさった場合でも、自分の宗派の作法にしたがっておこなうのが基本となります。

徳法寺が属している、真宗大谷派（お東）の焼香作法は以下の通りです。

仏前に進み、ご本尊を仰ぎ見ます。

この時は軽く一礼するだけで、まだ合掌はしません。

【画像一枚目参照】

次に焼香です。香盒（こうごう、お香の入れ物のことです）からお香をつまみます。

【画像二枚目参照】

つまんだお香を、香炉に二回入れてください。ただし、式に代理として参列した場合は一回となります。

焼香の際に、香をつまんだ手を額に当てる（押し頂く）ことはしません。そのまま香炉の炭の上に手を運び、お香をはなしてください。

【画像三枚目参照】

焼香が終わったら、次の人が焼香しやすいように乱れた香盒のお香を指でならした後、ここで初めて合掌し、念仏を称えます。

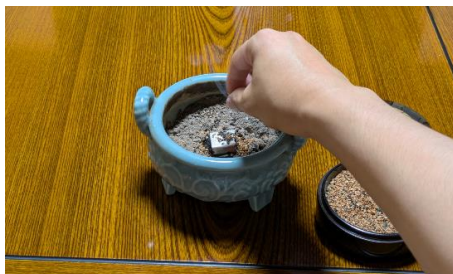
合掌を解いたら、最後に軽く頭を下げます。

【画像四枚目参照】

お釈迦様がいらつしやった頃のインドでは、体臭などの悪臭を除くために香料を焚いたり、身体や衣服に塗ったりしていました。これが焼香の起源であると言われていきます。これに従い真宗の焼香は、仏にお香を奉げるのではなく、仏に失礼にならないよう、合掌礼拝する前に、自分に香を焚きしめるという意味で行います。ですから、焼香の前に合掌してしまおうと、焼香する意味が無くなってしまふことになります。

作法通りにしなければ、何か悪い事が起こるといふものではありませんから、必ず守らなければならぬというものでもありません。しかし、行う上で本来の意味を知ること大切であると考えます。

焼香に限らず様々な作法は、学校で学ぶものではなく、家庭や地域社会で伝承されてきました。しかし、今はそれが難しい時代になっています。出来ることならば、お子様やお孫様に、正しい知識を教えていって頂ければと思います。



茶と仏教

杉谷 淨

中国の一部地域では、起源が定かではないほど古くから茶を薬として用いていたようですが、中国全土で飲まれるようになったのは唐の時代になってからです。それが奈良時代の日本に遣唐使を通して伝わり、東大寺を建立した聖武天皇が「宮中に僧を召して茶を賜った」と文献にあります。平安時代には最澄が嵯峨天皇に日本で栽培された茶を点てて差し上げ、空海も唐から持ち帰った茶の種子を弟子に栽培させています。いくつかの寺院で栽培が行われましたが普及することはありませんでした。

北宋の書家・文人である蔡襄(さいじょう)の『茶録』に、茶を用いた遊戯が書かれています。中国では茶が葉から嗜好品へと変わってきたことがわかります。茶が広く飲まれるようになると、品種改良や入れ方の工夫がされるようになりました。すると、茶の良し悪しを争う茶比べや、茶の味と香りを競う闘茶、茶を点てた時の湯の色の透明さを競う白茶などの遊戯が生まれます。また、茶を入れるための道具なども作られるようになります。

一方の日本では、鎌倉時代に南宋で臨済禅を学んだ栄西が、現在の何倍も濃い抹茶を飲むことで修行中の眠気を覚ます為に茶の種を持ち込みます。禅を学ぶために栄西のもとを訪れた明恵がこの種を譲り受け、京都の梅尾(とがのお)と宇治で茶の栽培を



鎌倉時代の律宗寺院が経営していた銭湯で用いられた石風呂

始めます。当時、最も徳の高い僧侶の一人として知られていた明恵が、茶に、諸天加護・無病息災・父母孝養・朋友和合・悪魔降伏・正心修身・睡眠自除・煩惱消滅・五臟調和・臨終不乱という「茶十徳」と呼ばれる効用があることを説いたことで、各地で茶の栽培が行われるようになりました。

鎌倉時代後期、律宗の寺院は、平安時代から大寺院が行っていた蒸し風呂を、庶民が利用できる銭湯として関西各地で経営し、生活困窮者を支援する資金源としました。銭湯の横に茶屋を併設し、湯上り

に茶を飲むことを奨励したことも、茶の普及の一因となりました。当時の銭湯があった場所の一つとして、奈良市旧市街に「風呂町」という町名が現在も残っています。

鎌倉時代末期には、後醍醐天皇や光厳天皇が、中国から伝わった闘茶を行ったという記録があります。上流階級の間で闘茶が流行すると、闘茶に金品などの賭け事が絡んできたことから、朝廷は茶寄合(闘茶)禁止令を出しますが、収まることはありませんでした。それどころか、宇治の茶の質が向上して梅尾茶と並ぶ品質になると、闘茶は次第に複雑化していきます。当初は二杯の茶の内から正解の茶を選ぶという単純なものでしたが、四種類の茶を十服飲み、それがどれと同じかを当てるという「四種十服茶」や「二種四服茶」「四季茶」「釣茶」「六色茶」「系図茶」「源氏茶」など様々な趣向の闘茶が行われました。

はじめに上級階級で広がった茶は、庶民の間でも日常の嗜好品となっていきました。足利時代末期の京都を描いた「洛中洛外図」や「七十一番職人歌合」には、路上でお茶をいれて売っている行商人や小さな屋台で茶を点てる茶店が描かれています。当時のお茶は抹茶で、一服を一銭で売っていたことから「一服一銭」と言われていました。(次ページ図参照)

足利時代後期、京都では寺社の参詣者を目当てにした「茶屋」が急速に広まっていきました。「茶屋」の中には、給仕に遊女を置く店も現れたことから、徳川時代になると「茶屋街」は「遊郭」と同意語になっていきます。



東京国立博物館本『七十一番職人歌合』二十四番。左は茶釜や水桶を天秤棒で持ち歩き茶を売る茶売人、右は僧形が抹茶(粉茶)を勤めている「一服一銭」。

將軍足利義政が応仁の乱の後造営したのが、現在、銀閣寺と呼ばれている東山山荘です。この中に造られた四畳半の茶室 同仁齋で、時衆僧の能阿弥や相阿弥によって行われたのが、高価な茶器や掛け軸などを用いた書院茶礼でした。書院造りの部屋に禅宗寺院の特徴である床の間を配置し、床には唐絵を掛け、同じく唐物の天目茶碗や茶入れ、水差しなどの茶の

道具類を飾り、それらを賞翫しつつ礼式に則って茶をいただくというものです。優雅な書院茶礼が広まると、闘茶は享樂的な娯樂・賭博であると見なされるようになり衰退していきました。

浄土宗僧侶であった村田珠光は、律宗によって広まった入浴後に茶を喫する庶民の娯樂であった淋汗茶湯(りんかんちやのゆ)に、応仁の乱で奈良に逃れてきた能阿弥が伝えた書院茶礼を取り入れ、さらに、師である臨濟僧一休宗純(一休さんで有名ですよね)の不完全なものこそ美しいという教えを受け、書院の名器と民家風の草庵を融合した侘(わび)茶を生み出しています。次第に場の華やかさより、主人と客の精神的交流を重視した独自の茶の湯へと変化していきました。これが戦国期の武野紹鷗(たけのじょうおう)や千利休へと繋がり「わびさび」の美学へと発展していきます。

特に戦国期から徳川時代初期にかけては、茶の湯という文化が、政治面でも重要な役割を果たすようになりました。織田信長、豊臣秀吉などの多くの武将たちは、茶会に参加した者同士の間にも生まれる独特の「きずな」に注目したのです。戦国期は従来の権威や宗教が価値を失い、一族同士でも争うことが常となったために、互いの信頼関係をどう築いていけばよいのか分からなくなっていたのです。そのような中で「茶を点てる方とそれを飲む方」との間で互いの関係を確認するために、茶の湯を利用するようになっていきました。密接な人間関係を確認するために他人が入らないよう、わずか数人のみで茶の

湯が出来る小さな茶室が造られていったのです。

茶の湯を通しての強固な人間関係は、東本願寺の建立にも関わっています。大坂本願寺を織田信長に明け渡した後、教如上人が本願寺十二代目門主となりましたが、母親の如春尼は豊臣秀吉と組んで教如上人の弟である理光院(後の准如上人)を門主にしました。その後、秀吉は新たな本願寺(現在の西本願寺)を准如上人のために京都に建てました。一方、隠居させられた教如上人は全国の門徒からの寄進により大坂難波に新たな大坂本願寺を建立しています。この段階で、本願寺は二つに分かれてしまいます。関ヶ原の戦いでは、准如上人は後见人である豊臣方に味方し、教如上人は茶の湯仲間であった本多正信との関係で徳川方につきます。本多正信は徳川家臣でしたが、熱心な本願寺門徒であったことで徳川家を追われ、加賀の本願寺一揆に加わっていました。本能寺の変の後、徳川家に帰参すると、智恵第一の家臣として、徳川幕府初代家老となっています。徳川家康は豊臣を亡ぼした後、秀吉が門主にした准如上人に代わって、地震により大坂本願寺を失っていた教如上人を据えようとしたとも伝えられています。しかし、既に全国の門徒が教如派と准如派に分かれていたことから、教如上人に新たな本願寺(東本願寺)を建てたのです。こうして本願寺は東西の二つになりました。

もし茶の湯がなければ、東本願寺はなかったのかもしれませんね。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約もありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由です。途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子をを用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺前任職 杉谷淨

八月 足利仏教 十三 御伽草子2
九月 足利仏教 十四 戦国大名の登場
十月 足利仏教 十五 臨済宗

まだしばらく足利時代の話が続きます。

この時代、農村部では農民たちが経済力を持ち、京都や各大名の所在地では、公家でも武家でも農民でもない、町衆という階級が生まれてきます。彼らは下級武家に匹敵する力を持つようになり、文化的な生活を享受できるようになってきました。簡単な読み書きができるようになった町衆や上級農民を対象にした御伽草子(室町物語)とよばれる、多くの絵草子が作られました。絵の横に物語が書かれた、民衆向けの文学で、現在の漫画の先駆けともいえるものです。作者名もないこの物語は、およそ四百話にもおよび、内容も多岐に渡ります。

それまでの権力構造が崩壊し、いわゆる戦国時代と呼ばれる時代へ突入してゆきます。日本全国で繰り広げられた戦争は、身分社会の崩壊を加速させていきます。その中で新たな日本文化も誕生していききました。そこには仏教の影響も色濃くありました。その一つが臨済宗です。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺秋彼岸

マット・マイヤー

妖怪百鬼夜行イラスト展

九月二十日(土)から二十八日(日)まで

徳法寺では二回目となるマット・マイヤー氏のイラスト展を行います。今回は大型のA1サイズのイラストを含め五十点近くの展示となります。是非、楽しい妖怪たちに会いに来てください。

住職交代にともない、彼岸での作品展示は、今後、不定期開催となります。

秋彼岸中日及び永代経法要

九月二十三日(火・祝)午後二時から午後四時まで
勤行の後、当寺新任職の法話となります。



表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhonji.com>